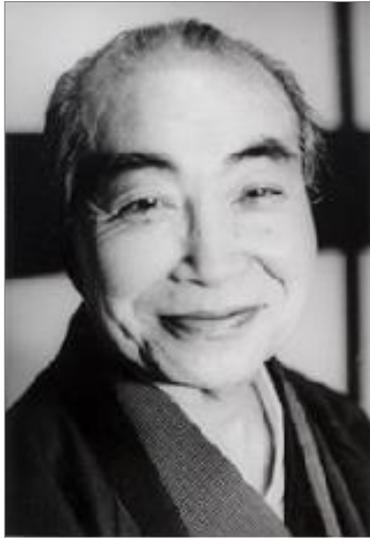


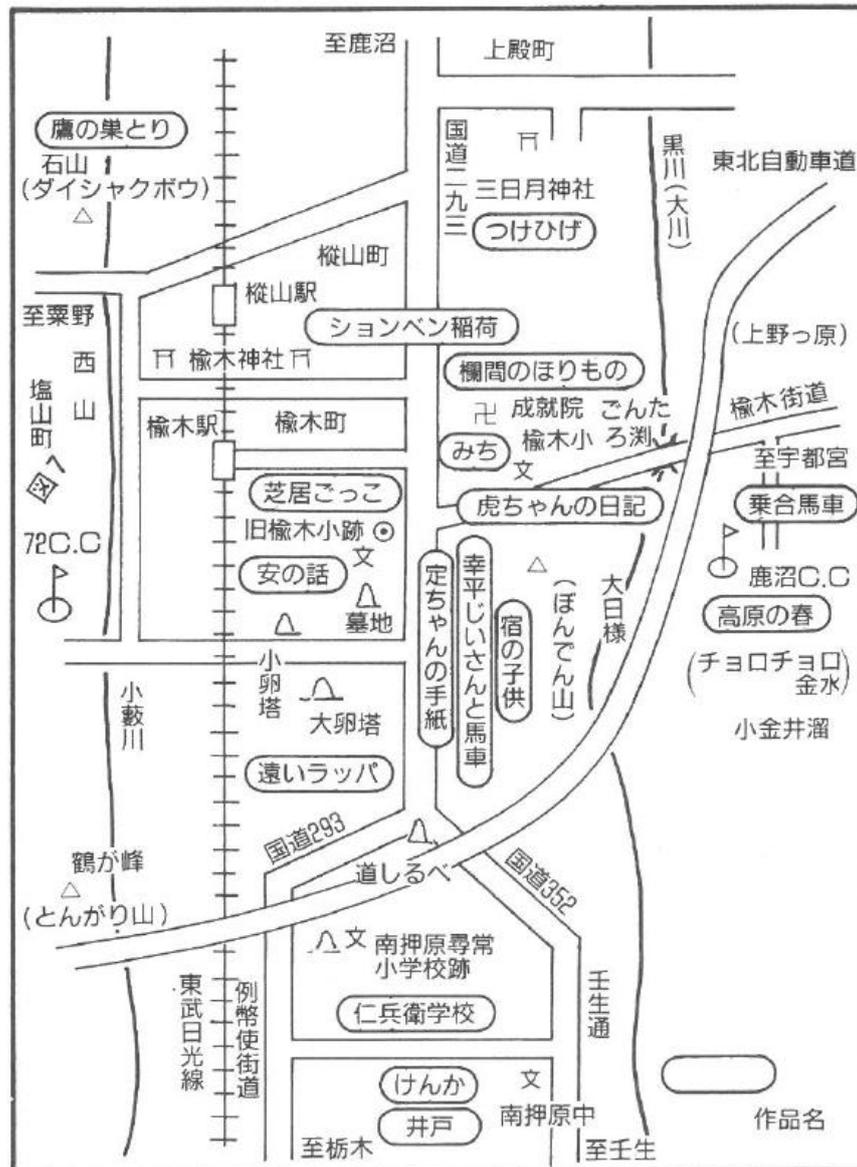
# 千葉県三作品のふるさとを訪ねる



千葉県三は明治25年(1892)、河内郡篠井村(現・宇都宮市篠井町)に生まれ、小学3年生の時、楡木尋常小学校に転校し、上京するまでの15年間を過ごしました。後に書かれた郷土童話と呼ばれる作品の多くは、楡木を中心とした鹿沼市内を舞台に描かれています。

上京した省三は、児童文学雑誌「童話」の編集のかたわら執筆活動に励み、「虎ちゃんの日記」「鷹の巣とり」など、郷土の香りのする作品を次々に発表しました。省三作品は、日本で初めて児童文学にリアリズムを持ち込んだといわれ、現在も高く評価されています。このほか、小学校の教科書に採用された「チックタック」などの幼年童話など、幅広く活躍しました。

## 作品の舞台



# 作品の舞台について

## ◎三日月神社（上殿町）

上殿町の新上殿橋西側にある三日月神社は、月読命（つくよみのみこと）を祭った駒場家の氏神です。この神社に豆腐を供えて願をかけると、いぼやおできが治るといわれ、多くの人々の信仰を集めていました。

祭日は旧暦の一月三日です。「つけひげ」では、秋祭りの縁日の舞台として、三日月神社が登場します。



## 作品 ◇「つけひげ」◇

秋のとりいれがすむと鎮守祭です。毎日のように、どこかの村でたたく太鼓の音が、ひろいたんぼを渡って聞こえてきます。一里ほど北の、三日月さんというお宮のお祭りが一番にぎやかでした。わたしと弟は、前の日にお友だちと約束して、その三日月さんへあそびに行くことになっていました。出かける時、母はわたしたち二銭ずつおこづかいをくれました。そのころでも、二銭というおこづかいは、お友だちのにくらべるとずいぶん少ないほうでした。「おめえら、おつきくなると、上の学校さあがんだかね。ほかの子供らみたいに、やたらにこづかいつかうんじゃないよ」母から、いつもそう云って聞かされていました。

（中略）

帰るとき、お友だちは、てんでにつけひげを買って、それを鼻の下につけました。わたしと弟は、買えませんでした。「おら、校長先生だ」「おら、郡長さんだ」「なんだい。おら、県知事さんだぞ」「おら、陸軍大将だい」てんでに、肩をいからして、キャッキヤ云いながら、たんぼ道を帰って行きました。お医者さんの弥ちゃんが、つけひげを二つ持っていました。それをみると、弟はそばへ行って、「ひとつくん、な、悪い方でいいから、な」とせがみました。そして、とうとう片方をもらって、鼻の下につけて、お仲間入りしました。わたしは、ひげがないので、みんなの後から、すごすごついて行きました。弟が足をとめて、わたしを待っていました。「兄さん！貸してやんべか」「いらね！」わたしは、おこりつけるように云うと、ふいと横をむいて、暮れて行く寒いたんぼに、あてもなくじっと眼を走らせていたのです。



## ◎ダイシャクボウ（塩山町）

国道 293 号線を大門宿から栗野方面へ向かって進んだところに石山と呼ばれる山があり、ここが「ダイシャクボウ」と呼ばれる場所で、省三の代表作「鷹の巣とり」の舞台となったところ



です。  
ダイシャクボウは、「大師が窪」「帝釈坊」「大蛇が窪」などから転じたとも言われますが、山の上には弘法大師が十六羅漢を刻んだといわれる「姥母石（うばいし）」や「大師の硯石」「空海の洗水池」など、弘法大師にまつわる伝承が伝えられています。

### 作品 ◇「鷹の巣とり」◇

ダイシャクボウのぼたん杉に、鷹が巣をかけたそう。おめえ見たけと仙ちゃんに聞くと、「見たとも、おら、草刈りのけえりに見た」と云う。

そばにいる小さい助治まで、「おらも見た、でっかい鳥だぞ。こう、はねえひろげて、西山から、ダイシャクボウの方さ、グーンとのはしてったっけ」なんて云う。

（中略）

三ちゃんは、どこもけがもしなかったし、ただ、びっくりしただけなんだから、とうに元気になっていた。歩けば歩かれるし、笑えば笑えたんだ。けれど、おれらがあんまり大事にするものだから、すっかりあまえてしまっ、くるしゆけ、三ちゃん。はあ、すぐだかんね」なんて云うと、わざと、「ううん、くるしゆ」なんて云うんだ。それが、だんだんおれらにもわかってきた。

山をおりたとき、喜作ちゃんが、「三ちゃん、おめえ、家がどっちにあるか、わかるけ。云ってみな」と聞いた。

すると、三ちゃんは、ちゃんと家の方をむいていたのに、くるりと、うしろをむいて、とてもあまったれた声で、「アッチー」と云った。

それを聞くと、おれらは、こらえきれなくなって、とうとう一度に、わーっと、笑いだしてしまった。そして、三ちゃんを真中に、アッチー、アッチーと云っては、アハアハ笑いながら、村へ帰ってきた。

それから、おれらの仲間には、この、アッチーがはやりことばになった。「仙ちゃん、おれの帽子、しんねか」こんなことを聞くと、仙ちゃんはクルリと向うをむいて、「アッチー」と云うのだ。そのたびに、おれらはお腹をかかえて笑いこけた。

## ◎旧千葉県三記念館（楡木町）

旧千葉県三記念館は、平成5年（1993）に省三の生誕100周年を記念して、省三の教え子である楡木在住の福島充氏が、資材を投じて建設したものです。

旧記念館の西側の空き地になっている場所は、かつて観音寺というお寺があった場所で、お寺の庫裡を利用して楡木尋常小学校が開校しており、明治42年に現在の楡木小学校の場所に移転するまで使用されていました。

作品中に出てくる「正行寺」のモデルが観音寺です。



## 作品 ◇「安の話」◇

正行寺の墓場の南はずれに、せまい日あたりのいい芝ッ原がある。春になると、金いろの、おちょこのようなキンポウゲが咲いたり、タンポポの綿毛が、フワフワとんでいたりする。雑木まじりの、篠竹の藪が、北側をいっぱいふさいでいるし、あとの三方は、ひくい桑畑にかこまれていて、日が照っていさえすれば、冬のさなかでも、ポッカリとあたたかい。

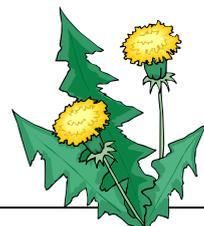
安の住んでいる小屋は、その芝ッ原に建っていた。麻殻と、わらむしろでこしらえた、三角形の、ちいさい小屋だった。

（中略）

「あ、絵がかいてあら！こら、安がかいたんだな！見ろ、みんな、いろんな絵がかいてあんぞ！」うつむいて、ぼんやり突っ立っていた安は、それを聞くと、急にとびかかって、手帳を取りかえそうとした。

「なんでえ！見せたっていいじゃねえか。へるもんでもあんめし……」大作は、取りかえされまいとあらそった。そのはずみに、手帳はとじ目が切れて、バラバラになって、あたりに飛びちった。

安は、もうあらそおうとはしなかった。足下に散らばった紙きれを見つめたまんま、しばらく、気の抜けたように突っ立っていたが、そのうち、自分の小屋の方へ、のそのそ歩きだした。



## ◎南押原高等小学校跡地（磯町）

国道 293 号線東北自動車道のガード南側に、南押原駐在所があり、その裏側に「南押原高等小学校遺跡」の記念碑があります。記念碑には「明治三十一年四月栃木縣上都賀郡南押原村大字磯五一番地鈴木豊三郎氏宅を仮校舎として創立され、同三十七年九月、磯一〇八番地に校舎を新築移転した」ときざまれています。

省三は明治 34 年（1900）にこの学校に入学し、3 年 5 か月ここで学んでいます。ここが「仁兵衛学校」のモデルで、先生と子供たちとの心の交流がユーモラスに描かれています。



### 作品 ◇「仁兵衛学校」◇

そのころは、今のようなりっぱな学校は、町へ行たってなかった。おれらの村では、仁兵衛どんという人の古屋敷を借りて、学校につかっていたもんだから、みんな、仁兵衛学校、仁兵衛学校といていた。生徒が三十人ぐらいで、先生がひとりで、教室も、たったひとつきりだった。おまけに、その教室が、かぎなりに曲っていて、一番前には一年生、それから二年生と、順順上上の級がならんでいた。一番うしろの上級生のいるところは、うまやのあとに板を張ってつくったもんだから、へんに、こやしくさくって、じめじめしていた。そのかわり、先生の顔は、ときどき見まわってくる時のほか、見えないから、その間はどんなにいたずらしたって、知れっこなかった。

（中略）

「……皆さんは、私の最後の教え子である。どうかえらい人になって、わたしをよろこばせてくれ。そして、大きくなっても、このみすぼらしい、けれどなつかしい、仁兵衛学校を忘れないでくれ」桜井先生は、おれらに、そう云ってきかせたが、話が終わってから、思いがけず、桜井の駅の軍歌を、おわかれに歌おうと云いだした。そして、いつものように、むちをとりあげて、ふりはじめた。

ああ……おば、しげれる、桜井の……

さあ……との、わたりの……

ここまで歌ってきたとき、おれらは、口ぐせのようになっている、ハゲアタマが出かかって、思わず声をのんだ。

すると、桜井先生は、ちっともためらわずに、大きな声で、

——ハゲアタマア……

とつけたのである。それも、うれしそうに、ニコニコ笑って……

## ◎鹿沼市立南押原中学校(磯町)

現在の校舎の壁面には、昔の校舎の絵が描かれています。これが旧南押原高等小学校の校舎です。上記のように明治37年(1904)9月に移転新築された校舎で、戦後は南押原中学校として使用されました。省三は、この校舎に7か月学んで卒業しました。



### 作品 ◇「けんか」◇

丑は、鍛冶屋の子どもだった。頭あたまが小ちっちゃくて、眼めが細ほそくて、からだだけ、若い衆わかいしゅうみたいに大おっきかった。丑は、強つよいんだか、弱よわいんだか、誰だれにもわかんなかった。家うちでは、父ちやんの向むこう槌づちをうつくらいだから、ずいぶん力ちからがあるはずなのに、学校がっこうへくると、小ちっちゃい下したの級きゅうの子どもにまで馬鹿ばかにされた。のろまなことと、学問がくもんのできないことがもとだった。丑は、どんなにいじめられても、泣声なきごえひとつ立たてず、涙なみだひとつつぶこぼさなかった。ただ、ふだんでも青黒あおぐろい顔かおが、よけい青あおくなるだけだった。

(中略)

「ちきしょうッ!ちきしょうッ!ちきしょうッ!」今いままで、一口ひとくちもきかなかった丑は、つんざくようにこう叫おおびだした。そして、大おおきなこぶしで、金ちゃんきんをさんざんぶちのめした。

金ちゃんきんは、もうはねかえす力ちからもなくなって、なぐられるままになっていた。気きもくるったように、なぐりながらさけんでいた丑うしの声こえは、とつぜん、この時とき泣き声なごえにかわった。どんなにいじめられても、涙なみだひとつこぼさなかった丑は、勝うしった今いまになって、おんおんおおごえ、大お声お上げて泣なきだしたのだ。おれらは、あっけにとられて、そのようすをながめていた。

### ◇「井戸」◇

「しっかりつかまっているんだぞ。いいか、いいか」

先生せんせいは、念ねんをおして手てをはなした。つるべは、宙ちゆうに浮ういて、それから、そろそろ井戸いどの中なかにおりはじめた。丑うしの、頭あたまがかくれて、すがっている手首てくびがかくれて、とうとう、麻あさなわだけになった。麻あさなわが、こまかくふるえながらさがって行った。

丑うしは、二間けんおり、三間けんおりて行った。あたりは、へんにうすらつめたくて、シーンとしていた。先生せんせいだの、みんなの声こえが、遠といところからひびいてくるようだった。

丑うしは、だんだん大だい胆たんになってきた。上うを見上げると、ポッカリと、おてんとさまのように丸まるい、明あかるい空そらが見えて、そこから、三みつ四よつ小ちいさい顔かおがのぞいていた。

つるべは、まだ水みずへ届とどかなかった。ゆるゆると下したへおりて行った。そして、上うの丸まるい空そらは、ずんずん小ちいさくなって行った。

## ◎鹿沼市立楡木小学校（楡木町）

省三の父亀五郎は、明治32年（1899）から大正10年（1921）まで、楡木尋常小学校の校長を務めました。学校の場所は、最初は旧千葉県省三記念館の西側にあり、明治42年（1909）に現在の場所に移りました。宇都宮中学（現・宇都宮高校）を卒業した省三も、上京するまでこの学校で代用教員をしていました。



父・亀五郎の写真は、歴代校長の一人として現在も校長室に掲げられています。

### エピソード

#### ◆少年時代◆

省三の弟・芳男は「兄省三のこと」（『千葉県三童話全集6』月報6岩崎書店1968年）で少年時代の省三のことを次のように語っている。

皆からチビチビと呼ばれていた。それくらいだから運動や戸外での遊びはあんまり好きなほうではなかったらしい。何時も座敷の隅で雑誌や本ばかり読んでいたという。それだけに父は一人兄を愛し出張の折々には兄にだけは必ず本を買って帰り、且つ毎月雑誌もとってやっていた。その頃から作文が勝れていたらしく父の目は細るばかりであった。

#### ◆楡木尋常小学校・磯尋常小学校代用教員時代◆（一部抜粋）

先生は読書家だった。勉強が終わると、「豊臣秀吉」「アリババと40人の盗賊」「楡木の伝説」などを話してくれた。給料をもらおうとみんな本代に使ってしまった。先生のお母さんは給料を入れてくれないことをこぼしていた。座敷に本が高く重なっていたことを覚えている。（桐生忠一）

省三先生のごことは代用先生と言っていた。権太郎渕の原っぱで体操をやった。ダイシャクボウさ、遠足に行ったこともあるね。（春山トク）

毎日弁当をしまおうとお話をやっていたね。生徒たちはそりゃあ楽しみにして夢中で聞いていましたよ。それが、次の授業の鐘が鳴ってもやめなかったり、ひどい時は読み方も何もやらんで2時間もぶっ続けでやったり（塩沢孫三郎）

綴方を一生懸命教えてくれたっけが、「そのままもらさず書け、あったこと、思ったことをそのまんま」とそればかり言われた。（鈴木幸一郎）

## ◎楡木橋・大日様・ごんげん淵

「虎ちゃんの日記」で、主人公の虎ちゃんがしょんべんをした橋のモデルです。また、同作品に出てくる「ボンデン山」のモデルは、橋の南西の崖の上に祭られている大日様、「大沼」のモデルは、大正時代までこの付近にあった「ごんげん淵」（ゴんタロ淵）と思われます。



### 作品 ◇<sup>とら</sup>虎ちゃんの日記<sup>につき</sup>◇

喜三ちゃんとおれと、草刈りに行っていたら、そこさ、源ちゃんと作ちゃんが、大籠しよって上ってきた。

おれは、こないだのことでずいぶん怒っていたから、「源公、おららの山ぶどう盗たな、お前だな！」と、大きな声で云ってやった。そしたら、源ちゃんは知らん顔をして、「おら、知んね、山ぶどうは、さるだって食わ」と云った。すると、作ちゃんまで、「そだ、山ぶどうは、くまだって食わ」と口真似して云った。おれは、そこで、作ちゃんも盗って食ったんだなとわかった。

(中略)

沼ん中の、蘆のしげった向うに、中島がちよんぼり浮いてみえた。おれは、それを見てるうちに、そうだ、あすこへ行っちまおう。と、急に思いついた。あすこなら誰にもわかりっこない。昼間は島であそんで、夜んなったら、こっそり村へ帰ってきて食物をさがせばいいんだ。— そうきまると、おれは胸んなかがらくらした。

「ころ、おめえもつれてってやんべ、な。おれとおめえと二人で島でくらすんだぞ」と云って、頭をなでてやったら、ころもうれしげにしっぽをふった。

(中略)

はいけい。私は足がよっぽどよくなって、毎日たいくつでしようねく候。今日あそびにきてくだされたく候。さきおととい虎ちゃんの父ちゃんがきて、虎ちゃんが見えなくなったと云い候。みんなたまげ候。今日、中島へ行ってたって聞いて安心して申上候。私の父ちゃんも母ちゃんも怒っていねから、どうか遊びにきてくだされたく候

小山源作

おかだたらぞうさま  
岡田虎蔵様



## ◎成就院（じょうじゅいん）

『みち』に登場する文殊院は、楡木町の中央にある成就院がモデルです。成就院には、昔、三人の子供がかかえるような大きなしだれアカシデがありました。昭和3年、国の天然記念物に指定されましたが、昭和5年古木となり、現存のものは二世です。また、成就院を舞台にした作品に『欄間のほりもの』があります。



### 作品 ◇みち◇

いろいろなみちがあった。大藪ぬけ道だの、小らんとずいどうだの、シオンベン稲荷新道だの、びよんびよん街道だの。

みんな、おれたち、子どもなかまだけしか、知らない道だった。そんな道が、どこにあって、どんな道だったか、それをお話してみよう。

おおやぶ みち  
大藪ぬけ道

これがおれたちの、一番はじめに見つけた道だった。

おれたちといっても、ほんとうの発見者は新屋の助治だった。だから、おれたちは、発見者の名誉を重んじて、しばらくのあいだ、この道をとおるには、かならず助治にことわって、その許しをえなければならぬことにしていた。もし、無断で通ったりしたら、仲間はずれにされても、しかたのないきめになっていた。



### ◇欄間のほりもの◇

楡の木寺の庭は、いつも、ひっそりとしていました。ほんとうの名は、成就院というのですが、山門のところに、めずらしく大きな楡の木があって、あたりの村の目じるしになっているくらいなので、いつからとなく、楡の木寺でとおっていました。

（中略）

少年は、わたしのいることさえ忘れはてたように、またたきもせず、欄間のほりものに見入っているのです。

瞬間、わたしの胸はとどろきました。

わたしは、その少年のひとみのなかに、ハッキリと、むかしみた、かがやかなお浄土の影を見つけたのでした。



## ◎上野原（南上野町）

榆木橋を渡り、宇都宮方面へ坂を上  
がっていくと、南上野町の台地に出ま  
す。ここが「高原の春」の舞台となっ  
た上野原（うえのっばら）です。この  
街道をトテ馬車に乗って引っ越して  
くる主人公一家の様子を描いたのが「乗  
合馬車」、その続編で、榆木に引っ越し  
てきた主人公が、友達と野山で遊ぶ風  
景を描いたのが「高原の春」です。



### ◇ のりあいばしゃ 「乗合馬車」

蘆原村まで、三里だと聞いた。途中の道が霜どけでだいぶいたんでいと云うので、はねだされないようにと、お父さんとお母さんのあいだへ、スッポリくさびのようにはめこませられた。もう、まもなく蘆原へつくだと思うと、胸がドキドキして、嬉しいような、こわいような思いで、いっぱいだった。「こんど行く村は、宿場だっちから、おまんじゅうやだの、おせんべいやだの、物売店がいっぱいあるんだよ」と、お母さんに聞かせられていた。「宿場の子どもは、いじが悪い。いじめられないように、行ってもおとなしくしてんだよ」とも聞かせられていた。そんなことを思いだしながら、後から後から馬車の前に現われてくる、知らない村の景色をいっしんにながめていた。

### ◇ こうげん はる 「高原の春」

それから、善ちゃんがめつけた、野原んなかの泉の話もした。「おら、毎日、チョロチョロ金水んとこさ遊びいぐんだ。目白だの、小雀だの、いろんな鳥が水のみくら。ちみたくって、あまくって、ほんとうにうめえ水だかな…」



（中略）

わたしたちは、笹すべりのように、土ほこりを立てて下へすべり落ちた。丘のすそには、ひものように、水草がやわらかくしげっていた、その水路を伝って、十間ばかり進むと、もう小さい谷はおしまいで、そこに、だれかが造ったような、きれいな泉があった。やわらかい水苔だの、青笹が、縁かざりのように丸くそのまわりをとりまいている。右も、左も、すべすべした草丘で、ただ正面に、灌木や雑木に小松のまじったあかるい林が、くさびの形に丘の上から泉まで落ちこんでいる。日の光が、水を透きて、底の砂を金色に光らしている。モッコン、モッコン、湧き上る水が、その金色の砂をたえずゆり動かしている。そして、あふれて、音を立てて、水草の中へ流れて行く。

## 千葉県三の略年表

年代	年齢	できごと
1892	0	11月27日、栃木県河内郡篠井村（かわちぐんしのいむら）（現在の宇都宮市篠井町）に誕生。
1984	2	校長を勤めていた父が今市市の吉沢尋常小学校に転任になったので、いっしょに今市の吉沢というところに引っ越した。
1899	7	父が鹿沼市の楡木小学校に転任になったので、いっしょに楡木に引っ越す。同校へ転校。
1901	9	南押原高等小学校（現在の南押原中学校）に入学。
1905	13	宇都宮中学校（現在の宇都宮高校）に入学した。同じ学校の先輩の半田良平に才能を認められる。
1910	18	宇都宮中学校を卒業。病気療養の後、楡木小学校の代用教員になる。
1914	22	半田良平をたよって、上京。出版社「日月社」に入社。
1917	25	増渕貞子（ますぶちさだこ）と結婚。「コドモ社」に入社。
1920	28	雑誌の編集責任者になり、雑誌「童話」（コドモ社）を創刊。
1923	31	コドモ社を退社、作家活動に専念する。
1925	33	『虎ちゃんの日記』を雑誌「童話」に発表。
1928	36	同人誌「童話文学」を創刊した。『鷹の巣とり』を発表。
1929	37	「童話文学」に『乗合馬車』『高原の春』『遠いラッパ』『けんか』『井戸』『仁兵衛学校』などを発表。最初の童話集「トテ馬車」を出版。幼年童話『ワンワンものがたり』を出版。
1932	40	雑誌「少女倶楽部」に『陸奥（むつ）の嵐』を連載。第二童話集『葱坊主』第三童話集『地藏様』を古今書院より出版。
1935	43	同人誌「児童文学」を創刊。同誌に『みち』を発表。翌年、同誌に『ションベン稲荷』を発表。
1938	46	第四童話集『竹やぶ』を古今書院より出版。
1939	47	毎日新聞事業部で『虎ちゃんの日記』を映画化。
1958	66	東京都北多摩郡（きたたまぐん）小平町（現在の東京都小平市）に転居。
1965	73	『チックタック』が『チックとタック』と改題され、小学一年国語教科書（光村図書）に採用される。
1967	75	第二回児童文学賞（モービル石油主催）を受賞。
1968	76	「千葉県三童話全集（岩崎書店）」に対して、第15回サンケイ児童出版文化大賞受賞。楡木小学校で出版記念講演。
1975	83	10月13日、心不全のため永眠。
1977	昭和52年	『鷹の巣とり』が小学四年国語教科書（東京書籍）に採用される。
1993	平成5年	省三の作品・遺品類が鹿沼市に寄贈される。（旧）千葉県三記念館が開館された。
2015	平成27年	南押原コミュニティセンターに併設し、千葉県三記念館が開館。



写真上  
妻・サダと

写真左  
宇都宮中学校生時代の省三（写真右）

子どものように、おどろきたい。

子どものように、よろこびたい。

子どものように、おこりたい。

子どものように、大泣きに泣きたい。

それなのに、人間は、年をとるにしたがって、いつのまにか、心からよろこぶことも、心からおこることもできなくなってしまう。さびしいことだと思う。さいわいに、私にも、そういう、自由な、いきいきした幼年の時代があった。それは、今でも、私の記憶のなかにあり、ときとすると、すぐ目の前のことのようによみがえってくる。私の童話は、その追憶をとらえて書いたものがおおい。もし、私の童話を読んでもくれるおさない人たちが、少しでも、そのおどろきにおどろき、そのよろこびによろこんでくれたらうれしいと思う。

千葉省三